

農漁業家民宿「のんびり村」の軌跡 ～グリーンツーリズム継続のヒントを探る～

研究員 大友 和佳子

目次

1. はじめに
2. グリーンツーリズムの概要
3. 「のんびり村」の事例紹介
4. グリーンツーリズム継続のヒント

1. はじめに

本稿の目的は、都市農村交流（グリーンツーリズム）¹の一つである農漁業家民宿「のんびり村」²の事例から、グリーンツーリズム継続のヒントを探ることにある。この目的は、日本でグリーンツーリズムが萌芽した1990年代から30年の節目を迎えようとしている2017年現在、その意義や展開方向について全国各地での議論が生じているからである。グリーンツーリズムは、国内で30年の歴史を築きつつあるが、その継続が難しいケースも多く、方法論への模索が続いている。

「のんびり村」が位置する石巻市尾ノ崎（旧河北町）は、東日本大震災で壊滅的な被害を受け、200戸を超える集落が流失、115名が死亡・行方不明、ほぼ全域が災害危険区域に指定された。しかし、そうした状況の中、「のんびり村」は、建物が奇跡的に残り、経営していた夫妻も一命を取り留め、様々な支援をつなぐ窓口としての役割を果たし続けた。現在は民宿経営は停止中ではあるが、レストラン経営を開始し、地域内と地域外を結び地域を再生させる拠点として重要な役割を果たしている。

2. グリーンツーリズムの概要

2-1 都市住民の農山漁村への関心の高まり

先ず、「のんびり村」の事例紹介の前に、グリーンツーリズムの概要について簡単に説明したい。グリーンツーリズムが誕生し続けている背景には、都市住民の農山漁村に対する関心の高まりがある。平成17年と平成26年に内閣府が実施した『農山漁村に関する世論調査結果』における「農山漁村への定住願望」についての調査結果を下記に抜粋した（図1）。

この調査によると、「農山漁村に定住してみたい」と考える層は、平成17年の20.6%から平成26年は31.6%に増えている。また同調査中の、「都市と農山漁村の交流の必要性」に関する調査結果では、約9割が「必要である」と回答している（図2）。

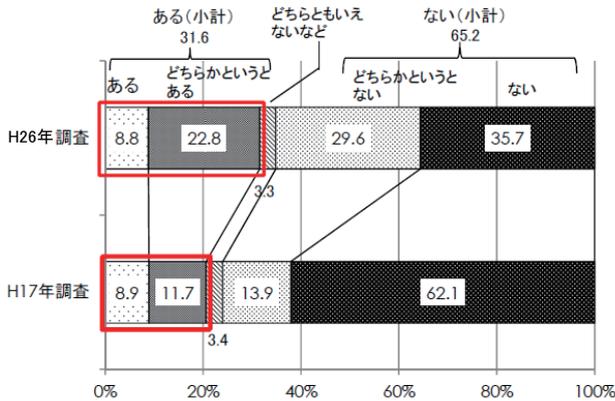
総じて、都市住民の農山漁村への関心は高まり続けている。そして、こうした都市住民の農山漁村への関心の高まりを受け誕生し続けているのが、グリーンツーリズムである。次に、グリーンツーリズムの誕生と展開について簡単に説明しよう。

1 これ以降は、都市農村交流（グリーンツーリズム）を、グリーンツーリズムとして明記する。

2 これ以降は農漁業家民宿「のんびり村」を「のんびり村」として明記する。

図1 農山漁村への定住願望

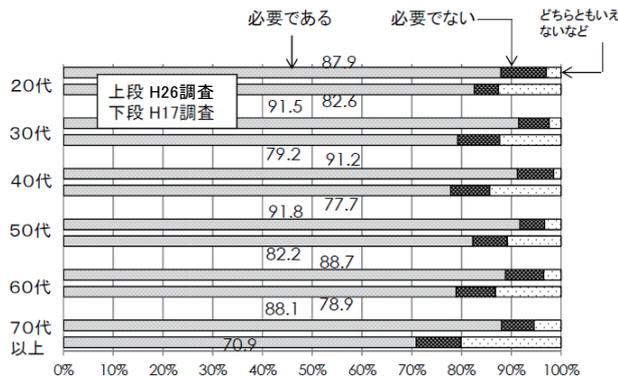
(都市地域の住民に対し) 農山漁村地域に定住してみたいと思う願望はあるか。(総回答者数1,147人)



出所：『農山漁村に関する世論調査結果』，平成26年，農林水産省，p. 3 から転載

図2 都市と農山漁村の交流の必要性

都市地域と農山漁村地域の間で相互に理解を深めるために、両者間で交流を進める事が必要だと思うか。(総回答者数1,880人)



出所：『農山漁村に関する世論調査結果』，平成26年，農林水産省，p. 4 から転載

2-2 グリーンツーリズムの誕生と展開

都市農村交流を意味する用語として「グリーンツーリズム」という言葉が誕生したのは、1992年である。その定義は、「グリーンツーリズムとは、農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動であ

る。」(農林水産省) というものである。

グリーンツーリズムで提案している新しい形のツーリズムの特徴を、青木(2010)は次のようにまとめている。それは、従来の自然破壊的、大衆的、商業的なマストツーリズムへの対峙概念であり、①地域中心志向、②地域資源の活用、③地域マネジメント、④環境保全重視、⑤双方向に利益を得る、といった方向性である³。

グリーンツーリズムは、西欧で誕生し、1990年代から2000年にかけて日本型グリーンツーリズムが模索された⁴。日本型グリーンツーリズムの特徴は、「スケールメリットを求める大規模開発」ではなく、農村ならではの農家の暮らしを生かしながら交流する手法である。そうした手法は、大規模リゾート開発などによる環境破壊などとは一線を画し、一回あたりの交流者数を減らし地域の資源や人々の暮らし、生き方を表現する観光の在り方である。こうした視点に基づいて、全国各地で様々なグリーンツーリズムの実践が起き、その方法が模索されてきた。

しかし、都市住民の関心の高まりに対して、農山漁村側の取組みが手薄であるというのが、現代日本の一側面でもある⁵。そうした背景を基に、次章以降、「のんびり村」の事例を紹介していきたい。

3 『転換するグリーンツーリズム』，(2010)，青木辰司，(株)学芸出版社，p. 15

4 青木前掲書，p. 16

5 「農家レストラン利用客の「食」と「農」に関する意識調査結果」，(2009)，和歌山大学地域再生学科 上村智秋他，観光学調査報告，p. 60

3. 「のんびり村」の事例紹介

3-1 石巻市尾ノ崎（旧河北町）概要

「のんびり村」がある石巻市尾ノ崎（旧河北町）は、2005年に石巻市に合併されている。2004年10月1日当時の旧河北町の世帯数は3,572世帯である。この広域合併により、石巻市域は北上川下流の仙台平野（石巻平野）から、女川町を除く三陸海岸南端（牡鹿半島）一帯まで広がり、震災直前の2010年時点での石巻市の人口は、約16万人であった（2010年国勢調査⁶）。

石巻市は、東日本大震災で大きな被害を受け死者・行方不明者数が3,977人となった⁷。旧河北町地域は、漁業・農業が産業の中心で、2010年時点では2,500人ほどが暮らしていたが、河北総合支所管内では、450人以上の市民が死亡・行方不明、その多くが旧河北町の住民であった⁸。特にこの地域の大川小学校では、児童74人、教職員10人が死亡・行方不明となった。

尾ノ崎が面している長面浦の水田（約224ha）も大部分が水没し、地盤沈下も著しく、行方不明者の捜索や救助も困難を極め、復旧・復興の遅れも目立っていた地域である。

3-2 「のんびり村」概要

1993年に宮城県石巻市（旧河北町）尾ノ崎に誕生した「のんびり村」は、日本の農漁業家民宿では先駆的な存在である。

開業したのは、（旧河北町）尾ノ崎で生まれた坂下清子さんという女性（1993年当時 49歳）で、自宅を改造した簡易なものからスタートし、現状は表1に示す通りである。

「のんびり村」の歴史的展開を、表2「のんびり村（坂下清子さん）の歩み」を参考にしながら説明をしていきたい。

写真1 東日本大震災後の^{ながつら}長面地域



出所：石巻市「東日本大震災 石巻市のあゆみ」より抜粋 2017年5月16日 更新
(<http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10151000/1501/20170405131537.html>)



- 6 平成22年 宮城県国勢調査より
<http://www.pref.miyagi.jp/cache.yimg.jp/uploaded/attachment/37294.pdf>
最終アクセス日：2017年11月10日
- 7 石巻市ホームページ 「被災状況（人的被害）」、平成29年10月5日 更新
<http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10106000/7253/20141016145443.html>
最終アクセス日：2017年11月10日
- 8 同上

表1 のんびり村概要

開業年	1993年	主なレストランメニュー ◇浜の定食…2,000～3,000円 (予算に応じて) 平爪かに・海の幸ごはん(かに・かき・いくら・さけ等) ◇おまかせ…3,000円 季節の魚のさしみ(ひらめ・あいなめ・すずき・たこ・ほたて・サーモン等) つぶ・ほたて・かに料理・小鉢・汁物・地元野菜等
所在地	石巻市(旧河北町)	
経営者性別(年齢)	女性・73歳(2017年現在)	
経営面積	田 1町6反	
主たる生産物	農業, 漁業	
地域区分	平地農業地域	
経営形態	専業農漁業家	
生産労働人数	2名(本人 夫)	
レストラン従業員数	1名/体験メニューや食材の確保には夫が協力	
年間平均売り上げ	400万円	
事業所得	200万円	
メニュー平均単価	2,000円	主な体験メニュー・講座 海のリースづくり・釣り・櫓こぎ体験・かきむき体験(一人約1,000円) ※家族の仕事を手伝いながら体験をしてくれる方は体験料無料。かにはずし体験・農作業・海仕事
営業期間	通年営業	
営業時間	予約に応じて	
予約の有無	完全予約制	
席数	24席	使用食材 ひらめ, あいなめ, すずき, たこ, ほたて, サーモン, カニ, いくら, 鮭他
		食材原産地 ■自家産 野菜100%/魚介類100%

出展: ヒアリングにより大友作成

表2 のんびり村(坂下清子さん)の歩み

第1期 (開業前)	1991年	飯館村の菅野村長の女性の夢を応援する講演に出会う
	1992年	夫を説得するために飯館村の菅野村長に二人で会いに行く。
	1993年	「のんびり村」をスタートさせる
第2期 (創業期)	1994年	宮城県でグリーンツーリズムを広めるための勉強会の開催地になる(開業当時の客数は、年30人から)
	1995年	ヨーロッパの農村景観やグリーンツーリズムを研修する機会を得る。「ミニドイツ」のような農村を作りたいと決意。
	1996年	東北地方の先駆けとして、グリーンツーリズムフォーラム等と呼ばれ講師業や、県内外の視察が増加
	1997年	
	1998年	
1999年		
第3期 (発展期)	2000年	簡易宿所営業の許可を取り、農漁業家民宿をスタートさせる。
	2001年	長面浦の自然体験が注目され、地域づくりプランナーの結城登美雄氏より木造和船が寄贈される
	2002年	男女共同参画への提言や、自然セミナーの長面浦での開催など、地域を変えていく取組みをさかんに行っていく。
	2003年	「のんびり村」10周年の記念パーティを行う。農水省「食アメニティ・コンテスト」で、優良賞を受賞。
	2007年	農水省「農林漁家民宿おかあさん100選」に選定される。
	2011年	東日本大震災により、地域が壊滅的な被害を受け、営業停止。
第4期 (震災からの再生期)	2012年	のんびり村で今まで構築した全国のネットワークが、河北町支援に入る
	2016年	「農漁業家レストラン のんびり村」としてレストラン営業を開始

出展: ヒアリングにより大友作成

写真2 のんびり村



3-2-1 「のんびり村」開業前

まず、始めに「のんびり村」が開業するまでの出来事について述べていきたい。「のんびり村」が開業した1990年代初めの農山漁村には、次のような文化があった。

それは、「都市の文化の方が進んでおり農村は遅れている。」だから、「農山漁村の自然環境や食文化、暮らし方等を提案するなんて、とんでもない。」という文化である。

こうした文化背景の中、旧河北町では1980年から坂下さんを中心に、地域の人々が地域の暮らし方や価値を見つめなおす実践として、「はまなす会」が誕生している。「はまなす会」とは、半農半漁の生活を営む女性5人が立ち上げたもので、地域の食生活の見直しや地域生産物の活用技術、生活運営を学ぶためのグループである。こうした地道な実践活動が「のんびり村」の土台となっている。

そして、坂下さんのこうした「地域の価値を見つめ直す運動」が飛躍的に発展したきっかけが、当時村づくりのリーダーとして全国的に尊敬を集めていた福島県飯舘村の菅野村長との出会いである。菅野村長は、当時「村が元気になるためには女性が元気になる必要がある」という考えを持っていた。坂下さんは、菅野村長の講演で、「これからの農村は女性が元気である必要がある。人生は片道切符、戻ることはできない。やりたいことがあるならやろう」という内容を聞き、農漁業家民宿の開業を決意した。

そして、「こんなところで民宿なんて開いたって人が来るわけがない」と頑なに反対を続ける夫を説得するために、夫を連れて菅野村長を訪れたのが1992年である。菅野村長の話を聞く内に、頑なに反対をしていた夫も理解を示し、「そんなにやりたいなら協力するからやってみればいい。」という一言を引き出すことができた。

農山漁村で女性が夢を持ち、主役になることが難しかった時代のことである。こうした坂下さんの取組みは、地域や日本全国の農山漁村の女性達の勇気となり、大きな流れを作る起点となった。

3-2-2 創業期

このように、様々な困難を乗り越え「のん

びり村」は立ち上がった。最初は「浜の食堂」としてレストラン経営を開始した。そして、さらに「のんびり村」を飛躍させた出来事が、1995年のドイツでのグリーンツーリズムの研修である。ドイツの研修で、坂下さんは地域の人々が地域の独自性に誇りを持って暮らしている様子に強い感銘を受けた。その当時の状況を坂下さんは次のように語る。「ドイツの人々は地域の独自性に誇りを持ち、地域の景観も美しく工夫しながら暮らしていました。ヨーロッパの実践を見て、河北町をドイツのような美しい場所にしたい。そう決意することが出来ました。」こうした決意の中、「のんびり村」の取組みは内外から高く評価され、様々な農山漁村の活性化に関するセミナーの講師や、地域外からの視察が増えていった。ここまでが、農漁業家民宿を開業するまでの助走の期間であると言える。

3-2-3 発展期

そうした活動を続けていく中、2000年に念願の簡易宿泊所の許可を取り農漁業家民宿をスタートさせていく。営業は農漁業をしながらなので、繁忙期は予約を断り、ゆったりとした真の交流をするため、客数は一日7人～10人に絞り一組を大切に方式を採用した。農漁業家民宿自体の収入は200万ほどであったが、当時の農山漁村の女性の収入としては大きかった⁹。

その後、尾ノ崎（長面浦）の海と山と川の自然を体験するセミナーの開催、国が推し進める男女共同参画施策への提言、農林水産省の様々な賞の受賞など、「のんびり村」は民宿の経営を通し、幅広い地域の魅力を発信する活動を展開させていった。坂下さんの最終ゴールが、農漁業家レストランではなく民宿であった理由は、一晩かけてじっくり交流する

9 坂下氏からのヒアリングによる。現金収入を稼ぐ手段が限られている地域において、自ら事業を起こし仕事とすることに大きな価値があったと言う。

中で、浜の暮らしを味わってほしかったからである。

3-2-4 震災からの再生期

こうした地域を再生させる取組みを展開させていた「のんびり村」だが、2011年の東日本大震災で壊滅的な被害を受け、一時的に民宿営業を停止している。しかし、経営者である坂下さんご夫婦が約30年に渡って作り上げてきた地域外との強固なネットワークが、旧河北町尾ノ崎地域の再生に大きな役割を果たし続けている。農漁業家民宿の営業は停止しているが、2016年にはレストラン営業を正式に開始し、現在も地域内外の人々をつなぎ、復興を前に進める重要な場所となっている¹⁰。

3-3 「のんびり村」の特徴

3-3-1 未利用資源の活用

それでは、「のんびり村」の歴史的展開から考察できるグリーンツーリズム継続のエッセンスについて触れることとする。先ず一つ目は地域では厄介者とされ、捨てられていた食材の価値に気づき活かした点がある。

写真3ののんびり村では、開業当初から「浜の定食」が、目玉メニューである。その定食では、「厄介もの」として地域では捨てられていたヒラ爪かかにが使用されている。河北町の長面湾で採れたヒラ爪かかには、刺し網漁などに交じって漁獲されるかにで、網に絡まりトラブルの種となりやすく、地域では捨てられていた。坂下さんは、ヒラ爪かかにの味の良さに着目し、かにそのものの味が生きるようなかにご飯、かにの唐揚げ、かにのつみれなどのかに料理を開発した。その他にも牡蠣や鮭など、河北町の長面浦で朝採れたての食材を、

写真3 のんびり村の「浜の定食」



漁師だからこそ作ることができる調理方法で提供し、「そこでしか食べることができない浜の定食」としてメニューを創造した。

「本当にいいものを提供すれば、人はついてくるのよ。すぐにお金にしようと思わないことが大事。注目されていない四季に応じた暮らしの価値を提供したいと考えています。」と、坂下さんは語る。

3-3-2 農山漁村ならではの時間と空間を活かす

さらに、「のんびり村」では農山漁村でしか過ごすことのできない時を提案しているところに特徴がある。「のんびり村」で提案している価値は、「ゆっくりと浜時間を楽しむ何もしなくていい時間」である。

農山漁村の体験旅行などは、無理に農作業を体験したり忙しく体験メニューが組みこまれていることがあるが、のんびり村で大切にしていることは、「ゆっくり星でも眺めながら、浜の日常の世界を楽しむ」という雰囲気である。そういうことなので、一日の受け入れ人数は5人～10人の一組、と制限してきていた（一泊2食付 6,000円から）。

2011年の東日本大震災で壊滅的な被害を受け、現在は規模を大きく縮小しているが、そ

10 宮城県のグリーンツーリズムを広報するホームページ (<https://www.pref.miyagi.jp/soshiki/nosonshin/e-min02.html>) では、「休業中」と記載されているが、2016年に正式に農漁業家レストラン経営を開始する許可がおりている。

写真4 坂下清子さん



れ以前は、食事だけを含めると、年間800人～1,000人ほどの規模で営業を続けていた。

3-3-3 女性の視点を活かすパートナーシップ

最後に、「のんびり村」の特徴として、坂下清子さんという女性の夢を、夫とのパートナーシップによって実現させた点について述べたいと思う。「常に進化し続けること、自分が変わり続けることが大事。上手に夫と一緒に仲良く進めていくことが継続の秘訣」と坂下さんは語る。

地域の女性達の暮らしや環境に対する想いを、地域再生の活力に結び付けていくことは、地域の持続的な発展には不可欠である。こうしたパートナーシップの姿を、日本各地に伝えていくことも坂下さんご夫婦の重要な仕事となっている。

4. グリーンツーリズム継続のヒント

それでは、「のんびり村」から学ぶことのできるグリーンツーリズムのヒントを最後にまとめたい。

一つには、「地域の資源を活かした独自の暮らしの価値」に気づくこと、そしてそれを守り、提案する強い主体性が必要である。地域によって異なる多様な地域資源は、異なる暮らしの文化を日本各地に創り上げてきた。それが日本独自の暮らしの文化である。

農山漁村の再生につながるグリーンツーリズムとして重要なことは、そこに住む人々が主体となり、地域資源や、それに基づく地域独自の暮らしの価値に気づき、活用し、発信していくことである。坂下さんの言葉では「飾らないありのままの暮らしを伝えること」である。

そのためには、自分達にとっては「当たり前」だけれども、地域外の人（よそもの）にとっては価値があるもの、に気づくことが重要である。そして、それを活かそうとする地域の人々の強い主体的な動きが必要である。

二つ目には、女性の力を農山漁村の再生につなげている点である。グリーンツーリズムを牽引する中心に、農山漁村の食文化がある。これらの担い手は主に農山漁村では女性である。「のんびり村」での料理の提案の背景には、女性が主体となり食文化を研究した「はまなす会」の実践がある。ヨーロッパでは、有機農産物、農山加工品の質の向上、環境保全型農業の実践を始め、農村の環境保護、グリーンツーリズムにおいて、女性が先駆的な役割を果たしたことが強調されている¹¹。農山漁村の再生において、女性の力を活かすためのサポートが必要であることは、近年声高

11 『なぜイタリアの村は美しく元気なのか』、(2013)、宗田好史、p. 203

に叫ばれている¹²。「のんびり村」の事例で、坂下清子さんという女性の想いや夢が、夫とのパートナーシップによって実現されたことは、農山漁村の女性の生き方に様々な影響を与えた。こうした女性の視点を活かすことも、今後のグリーンツーリズムの方向性において重要なことである¹³。

グリーンツーリズムが萌芽した1990年代から、30年を迎えようとする現在、実践の現場では様々な問いが生じている。「グリーンツーリズムの本質は何か」「次世代型のグリーンツーリズムとは何か」という問いである。さらに、農山漁村も都市も双方が、今後の在り方を問われている時代でもある。

次世代につながる都市と農山漁村の未来の関係を作るための一考として、「のんびり村」の取組みを伝えたい。

2011年の東日本大震災は無残にも、「のんびり村」があった旧河北町を壊滅させた。しかし、「のんびり村」は民宿の形態はやむなくレストランへと変えているが、今も、地域内外の人々の交流の拠点として重要な場所となっている。

以上

【謝辞】

本調査の実施にあたり、「農漁業家民宿 のんびり村」の坂下清子氏には、2002年からインタビューに膨大なお時間や資料の提供を頂いている。ここに記して厚く御礼申し上げる次第である。

【参考文献】

- ・「農村の現状に関する統計」、農林水産省、平成28年
- ・「農山漁村への定住願望」、『農山漁村に関する世論調査結果』、平成26年、農林水産省
- ・『グリーンツーリズム』、大江靖雄、(2013)、(株)千葉日報社
- ・『転換するグリーンツーリズム』、(2010)、青木辰司、(株)学芸出版社
- ・「農家レストラン利用客の「食」と「農」に関する意識調査結果、(2009)、和歌山大学地域再生学科上村他、観光学調査報告
- ・『地元学からの出発』、結城登美雄、(2010)、農山漁村文化協会
- ・「畑カフェ田んぼレストラン：はじめてなのになつかしい」、『現代農業』増刊号71号、(2006)、農山漁村文化協会
- ・『食と農の戦後史』、岸康彦、(2005)、日本経済新聞社
- ・「農山漁村の女性に関する中長期ビジョン懇親会報告書」、(1992)、農林水産省
- ・「都市と農村の相互依存性にもとづくライフスタイルを描く」、(2007)、季刊まちづくり16号

ホームページ

- ：石巻市「東日本大震災 石巻市のあゆみ」2017年5月16日 更新
(<http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10151000/1501/20170405131537.html>)
最終アクセス日：2017年11月10日
- ：平成22年 宮城県国勢調査より
<http://www.pref.miyagi.jp.cache.yimg.jp/uploaded/attachment/37294.pdf>
最終アクセス日：2017年11月10日
- ：石巻市ホームページ 「被災状況（人的被害）」、平成29年10月5日 更新
<http://www.city.ishinomaki.lg.jp/cont/10106000/7253/20141016145443.html>
最終アクセス日：2017年11月10日

12 農村女性起業については、1992年に農水省が公表した「農山漁村の女性に関する中長期ビジョン」が起点として考えられている。この報告書で初めて、「女性への起業支援」という言葉が使われ、そこでは、「朝市や農林水産物の加工、高齢者向け給食サービス、地場産品を用いたレストラン等女性が主体となって起業した経済活動が芽生え始めている。(中略) こうした活動を農山漁村における経済的に採算のとれる地域内発的起業の萌芽としてとらえ、その発展に向けて支援をしていくことが重要である。」と書かれている。

13 農産物加工、観光農園、農家民宿、輸出等に取り組んでいる経営体は、女性が参画している割合が高い傾向にある。：農林水産省「都市と農村の交流等に関する資料」(2014年)